

「特集②」日本のアル・ヌヴォー

東西交流のなかのアル・ヌヴォー

稲賀繁美

明治一四（一八八一）年の第二回内国勸業博覧会に、横浜の宮川香山は《褐釉蟹貼付台付鉢》と題する、大鉢（直径四十七センチ弱、図1）を出品している。鉢の縁には、まるで生き物のような二匹の蟹が、文字通り貼り付いて、鉢の中心を探ろうとしている風情が見る人を驚かす。それに先立つ明治九（一八七六）年のフィラデルフィア博

覧会でも、宮川作品が受賞し、明治一一（一八七八）年のパリ万国博では、金牌を獲得している。ここで欧米の関係者が注目したのは、宮川の「高浮彫」と呼ばれる技法。実際には別途に細工した粘土塑像を轆轤物の表面に貼り付けて焼成する。現在知られている類例にも、猫の描かれた花瓶の肩で、鼠の浮彫がこれ見よがしに戦

利品を引き回す滑稽な意匠や、蓮の葉に白鷺や翡翠を高浮彫で貼り付けた、高度の技巧を見せ付ける花瓶などの作例が残る。こうした宮川香山の高浮彫が、アル・ヌヴォー様式の成立に直接関わった可能性はないのだろうか。ジャン・カリエスは普通、一八七

八年のパリ万国博覧会で日本の青銅器や備前焼、瀬戸物に感化を受けたとされる。カリエスは殉教した聖人の首や荒唐無稽な神話的動物の顔を自在に造形した。炆器（gres cérame）に分類される粘土成型は可塑性が大きく、その特性を生かした作品は、カリエスの友人、ジョルジュ・オーエンチェルに継承され、これがフランスにおける日本趣味陶磁器の走りとなる。窯業で有名なセーヴルに生ま

れた、国立作業場のデザイナーとしての訓練を受けたエルネスト・シヤブレもまた、おそらくは同じパリ万国博覧会をきっかけとして炆器の可能性に開眼した。リモージュに拠点を持っていたアヴィラン家がパリ近郊のオートウイユにあつた陶磁器製造工房を設けると、シヤブレはここでフェリック・ス・ブラツクモンとも共同で製作を開始して

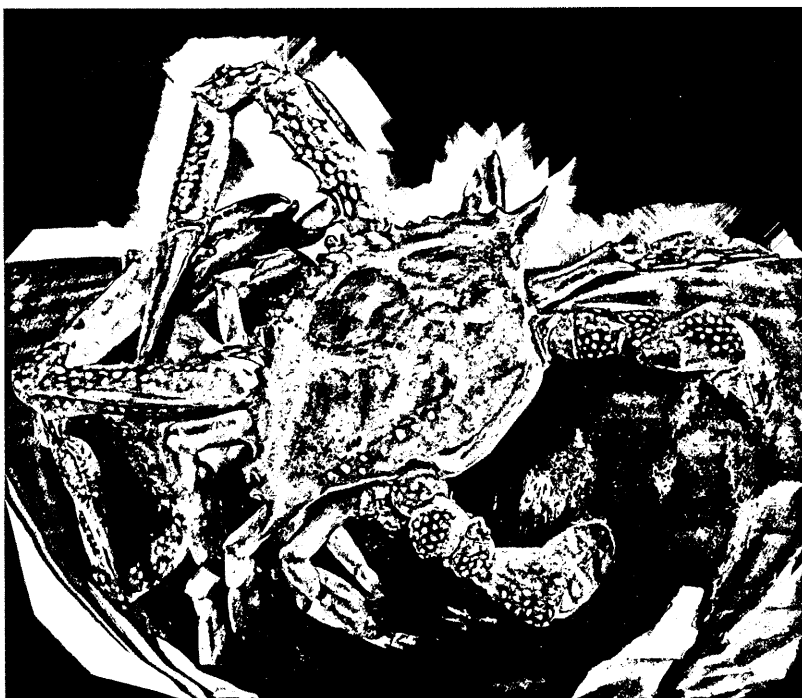


図1 宮川香山《褐釉蟹貼付台付鉢》(部分)1881年 東京国立博物館蔵
Image: TNM Image Archives Source: <http://TnmArchives.jp/>

いた。日本趣味の代表作として著名なセルヴィス・ルソーの食器セットは、一般にブラックモンの発案とされ、『北斎漫画』ほかの日本の版画から複写した動植物を軟質陶器の皿の絵柄として自在に取り込んだ発案が知られている。絵柄は日本起源だが、それを皿の形態とは無関係に、いわば無造作に投げ入れる偶然まかせの構図法は、しばしばフランス側の発案と見なされている。

シヤブレはこうした斬新な試みを身近に見ていたものと推定できるが、八〇年代に入ると、作業場の陶磁器装飾家、アルベール・ダムーズらとともに、日本の意匠を用いながら、花鳥のような自然主義的モチーフを貼り付けたり彫り込んだりした炆器を制作してゆく。ここでシヤブレの作例を特徴づけるのは、器の形状の左右相称や同心円構造を無視した図柄の配置、そして従来の陶磁器の常識を逸脱した、彫りの深い意匠の、大胆な貼り付け技術、さらには炆器に釉薬を流し掛けにする奔放な発想といつてよい。その三点のいずれにおいても、シヤブレが眼にすることのできた最良の見本、あるいは

最大の挑戦は、宮川香山の高浮彫や、その系列に属する日本製品が実現していた表現ではなかっただろうか。

そのシヤブレのアトリエで一八八六年から制作に励んだのが、世紀末象徴主義の画家として名高いポール・ゴーガン。彼の陶磁器製作の可能性に関しては、批評家のフェリックス・フェネオンが、的確な評価を残している。炆器の可塑性を自在に活用し、流し掛けた釉薬の偶然の軌跡を尊重し、加えて窯の火という、人知を超えた試練によって造形形態の刷新をめざす姿勢。藝術に対して自然の介入を許すのは、当時の西欧の藝術定義を毀損しかねない暴挙だった。だが、ゴーガンは敢えてその危険を犯すことでもって、かえって陶磁器を「彫刻」という自律した表現媒体の領域に近づける離れ業を演じている。自らの頭部を受難のキリストと重ね合わせた壺では、流れ落ちる釉薬が救世主の流す血の痕跡と化している。ゴーガンはこうして、自らをジャン・カリエスの末裔に位置づけて見せた。

アール・ヌーヴォーという名称は、日本美術商から転進したハン

ブルク出身のS・ビングが、パリのプロヴァンス街に一八九五年に開店した画廊にちなむ。一九〇〇年のパリ万国博覧会の機会に、ビングの展示館や工房を頻繁に訪れた日本人には、油彩画家として著名な浅井忠のほかにも、塚本靖が知られる。

塚本靖は東京美術学校の三代目の建築装飾の教官であり、後に伊東忠太や関野貞と並んで建築界の御三尊と呼ばれ、東京帝国大学工学部部長や建築学会会長を歴任して、建築家としては初めて芸術院会員となる。京都の出身で、東京帝国大学の造家学科を卒業したばかりの塚本靖が東京美術学校に赴任したのは一八九三年。その三年後の一八九六年、古社寺保存法の公布に伴い、塚本は日光東照宮の実測調査を依頼され、調査団を編成する。浅井忠もそれに十年ほど先立つ頃、スケッチ旅行の皮切りに日光を訪ねていた。果たして浅井や塚本は、パリで流行のアール・ヌーヴォー様式に接して、東照宮の絢爛たる装飾造形との類縁性を意識しなかったのかどうか。塚本は帰国後、三菱の船舶、天佑丸の内装をアール・ヌー



図2 ポール・ゴーガン《水浴する少女のある腕》(部分)1887-88年 コペンハーゲン、個人蔵

ヴォー様式で施したことが知られている。

同じ万国博覧会開催中のパリには、造家学科の後輩にして、塚本とおなじ三高出身の武田五一も、遅れて到着する。武田はマッキントッシュやウィーン分離派の建築を日本に伝えた人物としても知られるが、帰国後は図案科教授として、浅井とともに一九〇二年開校の京都高等工芸学校に奉職する。

校長は、中沢岩太。ゴットフリート・ヴァグナーの弟子であり、大学卒業後ドイツに留学し、陶磁器製法を研究した中沢は、帰朝後、理工科学校初代大学長を勤めていた。一八九九年の帝国議会で京都高等工芸学校新設が認められるや、中沢はその責任者となり、浅井や武田らの人選を進めるかたわら、パリを含む欧州視察に赴いていた。

このように、明治期日本の輸出工芸育成策との関わりの中に成立したオール・ヌーヴォーは、二〇世紀を迎えるや、京都における伝統工芸刷新の機運のなかで日本に受容されるに至る。「線のずるずる延びたるぐりぐり式」とは浅井忠が『ホトトギス』の「巴里消息」

(明治三十三年一月)に伝える形容。だが果たして、パリでは「人を驚かし当世に歓迎され」たこの「新式」が日本の古都ですんなり受け入れられるかどうかは、なお未知数だった。杉林古香の記録したところでは、浅井は狩野派のギクギクと節くれだつた線や圓山派の繊細な線では装飾図案には面白くなく、光琳・光悦などの「こせつかない、大手は、ぬんめりした線」がふさわしいとの見立てを示し、大津絵なども参考になるだろう、と述べている(『小美術』第一巻第四号、明治三十七年)。

浅井の図案に基づいて杉林古香が作成した実作例には、『春秋蒔絵螺鈿細巻煙草箱(花吹雪)』『梅蒔絵螺鈿料紙文庫』『鶏梅蒔絵螺鈿料紙文庫』など、浅井流の斬新でどこかとぼけた味のある図案が知られる。とはいえ在京の新聞記

者、黒田天外も記録するように、こうした浅井図案は「日本趣味を基礎」とはしているが、「洋画の手法」を交えているため、「之を好む者あると同時に、また好まざる者もあり」と、いくらか敬遠された様子が否めない(『京都美術』第二号、明治四四年)。

この浅井の試みに真つ向から対抗したのが、「天性の美術工芸家」と評された神坂雪佳。画家出身の浅井忠が、京都の有名な美術工芸の製作者にも「頭脳の仕事はない」(『京都日出新聞』明治三十九年九月九日)と決め付けた事への反発からだろうか、神坂雪佳は、欧米の意匠図案など「十分日本で頭脳をこしらへ」て後に一度見ればそれで十分、と切り返す。その背景には、欧米でも「泰西趣味の混交せる鵝趣味」ではなく、日本の「閑遠幽玄」への咀嚼が深まり、純日本趣味へと嗜好が移つたとの認識があった(黒田天外『京都美術』前掲)。雪佳は既に明治三五(一九〇二)年の欧州視察の段階で、オール・ヌーヴォーは欧州でも「醜鈍美術と悪称」されており、もとより「厭うべき」と思い「嘔吐」を催していたこの「新美術」を今後

「応用するの意志なし」と、断固たる拒絶の態度を表明していた。

このように、京都におけるオール・ヌーヴォー受容は、表面的には積極的活用と忌避という、両極にわたる振幅を示している。とはい

えそれらとともに、二〇世紀初頭以来の日本における琳派再評価の潮流に先鞭をつけたものだった。浅井忠と神坂雪佳との反目の背景には、「装飾の国」として日本を評価する世紀末欧州藝術の眼差

しへの極東の反応が潜んでおり、両者のオール・ヌーヴォーへの愛憎は、近代京都美意識の二側面を補い合う。

(国際日本文化研究センター教授)

現代の眼 553

東京国立近代美術館 ニュース

8 - 9月号 2005

Newsletter of the National Museum of Modern Art, Tokyo Aug. - Sep. 2005



ジョージ・キート《反映》1947年 ギャラリー・ケモルド蔵



板谷波山《葆光彩磁チューリップ文花瓶》1917年頃 石川県立美術館蔵

特集1

アジアのキュビズム

一九七八年アジアへの旅／アジアのキュビズム展に想う……後小路雅弘
キュビズムの意味……本江邦夫

特集2

日本のアール・ヌーヴォー

東西交流のなかのアール・ヌーヴォー……稲賀繁美
新美術はどこから—アール・ヌーヴォーと日本……森仁史

◆ 【作品研究】

原田直次郎作《騎龍観音》について——ミュンヘンと護国寺と……蔵屋美香

【所蔵作品展】

沈黙の声—遠藤利克 ビル・ヴィオラ キムスージャ……中林和雄